高校生の生活習慣からみた住まい学習に対する意識

(愛媛県立松山商業高等学校) 中 原 優 (住居学研究室) 曲 田 清 維

Consciousness of Housing Education on High School Students' Lifestyle Yu NAKAHARA and Kiyotada MAGATA

(平成24年6月5日受理)

第1章 研究の目的と方法

1. 研究の目的

私たちの住生活を取り巻く環境は多くの問題に直面している。住生活は気候風土や社会、経済、環境のみならず、家族や地域との関係においても深い関わりを持っているため、住まい学習には総合的な視点から問題をとらえていくことが求められている。このため、住まい学習は、家庭科の住居分野を中心に、総合的な学習の時間などでも学習されてきた。だが、家庭科では他の分野と比較しても住居分野の授業時間数の少なさは否めず、教員の学習経験や講習の機会の少なさにより教員がその指導に苦手意識を抱いていることや、学習者のプライバシーの問題による適切な教材の不足も幾つか指摘されている。また、学習者である児童・生徒にとっても、他の分野と異なりすぐに家庭で実践・改善することが難しいため、興味・関心の低い分野となっている。

このような問題に対して、教員の住まい学習に関する 講習も増え始め、住教育の目的・方法を具体的に示した 「『住教育』の授業づくりガイド」(財団法人 日本住宅 センター;注1)の策定や、住宅メーカーによる出張授 業(注2)など、教育現場だけでなく、民間の住宅関連 団体や企業でも取り組みが進められている。

こうした住まい学習の現状を受け、本研究では、学習者である高校生が住まい学習に対してどのような意識を持っているのかを把握するためアンケート調査を実施した。調査内容は、高校生の住まい学習に対する意識、生徒の家庭での生活習慣(食事や掃除の手伝い、地域行事への参加など)を踏まえた上で、住まい学習の経験の有無、学習領域に対する興味・関心を尋ねた。

2. 研究の方法

2011年10月下旬に、愛媛県松山市内の2つの高校において、1年生を対象にアンケート調査を行った。対象校は、普通科を設置する高校(A高校)と、総合学科を設置する高校(B高校)の2校である。両校とも、調査時は「家庭基礎」を履修しているが、B高校の生徒のみ希望により2年時からも「家庭総合」を履修することが可能である。また、調査時の家庭科の授業における住居分野の学習状況は、A高校は未学習であったが、B高校は一部学習している状況であった。調査票の回収数は473、うち有効回収数は469であった。

第2章 調査対象者の概要

調査対象者の所属別人数は、A高校が354人 (75.5%)、 B高校が115人 (24.5%) であり、A高校の生徒が多い。 性別は、全体でみると男子が227人 (48.4%)、女子が 242人 (51.6%) と、男女比はほぼ半々である。学校ご との男女構成比をみると、B高校の女子が多くなってい る (表1)。

表 1 学校種別男女別対象者数

Z. TARMINAMA					
上段:人数		所 属			
下段:%		合 計	A高校	B高校	
	^ <i>t</i> -	全体 46	469	354	115
	全	144	100.0	75.5	24.5
性	男	子	227	186	41
別)	7	100.0	81.9	18.1
	++	子	242	168	74
	女	1_	100.0	69.4	30.6

第3章 対象者の生活習慣

生徒の生活状況として、まず「個室の有無」を尋ねた。 さらに、生活習慣として生徒の「掃除」「洗濯」「食事作 り」「ゴミ出し」の手伝い等に加え、「地域行事への参加」 の5項目について質問した。

1. 生活習慣

(1) 個室の有無

自分の部屋(個室)の有無を尋ねた結果,「自分一人の部屋がある」と回答した生徒が395人(84.2%)で圧倒的に多く,次いで「誰か(両親,兄弟など)と共同の部屋がある」が64人(13.7%),「ない」が10人(2.1%)という結果であった。所属別や男女別の分析でも結果に差はなかった(表2)。

表2 個室の有無

項目	人 数	全体 (%)
個室	395	84.2
共同室	64	13.7
なし	10	2.1
合計	469	100.0

(2) 掃除

「自分の部屋や家族との共同スペースなど、家の掃除を自分でする、または手伝いますか?」という問いに対して、「たまにする」と回答した生徒が215人(45.9%)で最も多く、次いで「あまりしない」が128人(27.3%)、「する」が92人(19.6%)、「全くしない」が33人(7.0%)という結果であった。掃除を「する」「たまにする」と回答した生徒が過半数を超えており、掃除は生徒にとって実践しやすい生活習慣であることが分かる。また、女子の方が男子よりも掃除を行う傾向が強く、「する」と回答したB高校の生徒は、同じ回答のA高校の生徒の約2倍であった(表3)。

表3 掃除の手伝い

20 かはり十四い		
項目	人 数	全体 (%)
する	92	19.6
たまにする	215	45.9
あまりしない	128	27.3
全くしない	33	7.0
不明	1	0.2
合計	469	100.0

(3) 洗濯

「自分の衣服(制服, 私服, 上履き, 体操着など)を自分で洗濯する, または手伝いますか?」という問いに対して「あまりしない」と回答した生徒が179人(38.1%)で最も多く, 次いで「全くしない」が133人(28.4%),「たまにする」が115人(24.5%),「する」が42人(9.0%)であった。掃除とは異なり「あまりしない」「全くしない」と回答した生徒が3分の2で, 洗濯をしない生徒が多いことが分かった。衣類の洗濯は保護者が行う場合が多く,生徒自身が学校で使うものであっても保護者が洗濯しているようだ。男女別にみると, 洗濯をする女子は男子よりも多く, B高校の生徒はA高校の生徒よりも多かった(表4)。

表 4 洗濯の手伝い

項目	人 数	全体 (%)
する	42	9.0
たまにする	115	24.5
あまりしない	179	38.1
全くしない	133	28.4
合計	469	100.0

(4) 食事作り

「自分の食事(朝食、夕食、弁当など)を自分で作る、または手伝いますか?」という問いに対して、「あまり作らない」と回答した生徒が169人(36.0%)で最も多く、次いで「全く作らない」が167人(35.6%)、「たまに作る」が109人(23.3%)であった。「作る」と回答した生徒は24人(5.1%)と少なく、日常的に食事作りを行っていないことが分かる。それでも約4分の1の生徒が、家庭で食事作りに関わっていることになる。また、食事を作る生徒は女子の方が男子よりも多く、B高校の生徒の方がA高校の生徒よりも多かった(表5)。

表5 食事作りの手伝い

項目	人 数	全体 (%)
作る	24	5.1
たまに作る	109	23.3
あまり作らない	169	36.0
全く作らない	167	35.6
合計	469	100.0

(5) ゴミ出し

「あなたの家のゴミ出しをする,または手伝いますか?」という問いに対して,「あまりしない」と回答した生徒が159人(33.9%)で最も多く,次いで「全くしない」が141人(30.1%),「たまにする」が130人(27.7%),「する」が39人(8.3%)という結果であった。この結果から,ゴミ出しをよく手伝う生徒は少ないことが分かる。また,ゴミ出しを手伝う生徒はB高校の方がA高校よりも多かったが,男女別ではこれまでと異なり,男子の方が女子よりも多かった(表6)。

表6 ゴミ出しの手伝い

項目	人 数	全体 (%)
する	39	8.3
たまにする	130	27.7
あまりしない	159	33.9
全くしない	141	30.1
合計	469	100.0

(6) 地域行事への参加

「地域の行事(祭り、清掃など)に参加しますか?」という問いに対して、「あまり参加しない」と回答した生徒が160人(34.1%)で最も多く、次いで「たまに参加する」が124人(26.5%)、「全く参加しない」115人(24.5%)、「参加する」が70人(14.9%)であった。「あまり参加しない」「参加しない」と回答した生徒が約6割であったが、「参加する」と回答した生徒も70人(14.9%)と他の項目と比較して多いことが特徴的である。祭りや清掃活動といった地域行事に対する積極性は、生徒が住む地域の影響も考えられ、そういった地域差が他の項目とは異なる特徴として表れたのだと思われる。また、所属別の差はみられなかったが、男女別では男子の方が女子よりも多かった(表7)。

表7 地域行事への参加

項目	人 数	全体 (%)
参加する	70	14.9
たまに参加する	124	26.5
あまり参加しない	160	34.1
参加しない	115	24.5
合計	469	100.0

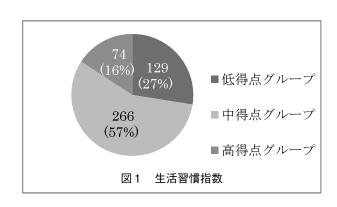
2. 生活習慣指数

これまでにみた対象生徒の生活習慣(状況)について、生活習慣と住まい学習への興味・関心との関連を分析するために「生活習慣指数」として数値化した。この指数は掃除、洗濯、食事、ゴミ出し、地域行事への参加の5項目について「する」「作る」「参加する」等と回答した場合は3点、「たまにする」等は2点、「あまりしない」等は1点、「全くしない」等は0点とし、5項目15点満点で、生活習慣指数としている。

対象生徒469人の生活習慣指数の得点を、 $0 \sim 4$ 点の低得点グループ、 $5 \sim 9$ 点の中得点グループ、 $10 \sim 15$ 点の高得点グループ(以下G)として分けた。その結果、 $5 \sim 9$ 点の中得点Gが266人(56.7%)で最も多く、次いで $0 \sim 4$ 点の低得点Gが129人(27.5%)、 $10 \sim 15$ 点の高得点Gが74人(15.8%)という結果になった(図 1)。

この理由として、洗濯、食事作り、ゴミ出しを行う生徒が少なかったことが中得点G、低得点Gが多くなった理由の1つだと考えられる。この3項目は、高校生にとって行いにくい家事であるようだ。また、それぞれの項目同士の関連をみると、ゴミ出しと地域行事への参加に関連があり、どちらかを行う(または行わない)と回答した生徒は、もう片方も行う(または行わない)と回答する傾向が強い。

所属別ではB高校の高得点Gの割合が30人 (26.1%) とA高校の44人 (12.4%) よりも多かった。男女別では、 低得点Gは男子73人 (32.2%) よりも女子56人 (23.1%) が少なく、高得点Gは男子29人 (12.8%) よりも女子45 人 (18.6%) がやや多かった。

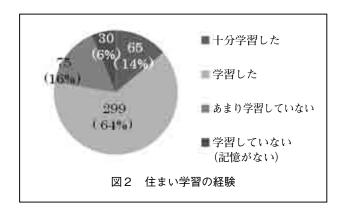


第4章 住まい学習の経験

1. 住まい学習の経験の有無

小学校,中学校での家庭科の住まい学習の経験について質問した。「学習した」と回答した生徒が299人(63.8%)で最も多く,次いで「あまり学習していない」が75人(16.0%),「十分学習した」が65人(13.9%),「学習していない(記憶がない)」が30人(6.4%)であった(図2)。

このことから「十分学習した」「学習した」と回答した生徒が約8割に達している一方で、「学習していない(記憶がない)」と回答している生徒も2割強存在する。家庭科の授業で住まい学習を経験していないわけではなく、生徒の記憶にない場合がほとんどであろう。住まい学習を経験しているとする生徒が多い一方で、生徒に与える印象が少ないということが分かる。



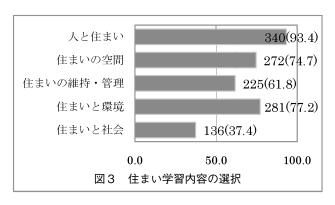
2. 経験した住まい学習の内容

住まい学習を「十分学習した」「学習した」と回答した364人に限り、これまでの住まい学習の内容を大まかに把握するため、学習したことのある内容を選択してもらった(複数回答可)。選択する内容は、住まい学習を大きく5領域に分けている。これは、「住教育ー未来へのかけ橋ー」(注3)及び「『住教育』の授業づくりガイド」(注1)で分類されている住教育カリキュラムの構成を参考に領域分けを行った。また、キーワードは学習指導要領や小学校、中学校、高等学校の家庭科教科書を参考に、重要語句とされているものを挙げた(表8)。

その結果,最も多く選択されていた内容は『人と住まい』で340人 (93.4%)であった。次いで『住まいと環境』が281人 (77.2%),『住まいの空間』が272人 (74.7%),『住まいの維持・管理』が225人 (61.8%),『住まいと社会』が136人 (37.4%)であった (図3)。

表8 学習内容とキーワード

学習内容 (領域)	キーワード
人と 住まい	住まいの役割,家族と住まい 気候風土・文化と住まい (和式と洋式,いす座と床座)
住まいの 空間	生活行為と住空間 (食事・休養など生活行為に合わせた空間) 自分らしい住まい (間取りや家具の配置)
住まいの 維持・管理	身の回りの整理・整頓 住まいの清掃と手入れ (汚れと掃除方法)
住まいと環境	健康で快適な住まい (明るさ,温度,湿度,音,シックハウス症候群など) 家庭内事故と対策,シルバー体験 住まいのバリアフリー 災害に備えた住まい (震災対策・防犯対策)
住まいと 社会	自然と共に住まう(自然エネルギーの利用) 地域と住まい,まちづくり



『人と住まい』は、最初に学習することが多く、小中学校で繰り返し学習する内容となっており、印象に残りやすく選択者が多くなったのではないかと考えられる。『住まいの維持・管理』や『住まいの空間』の理由としては、実際に温度計を使用する体験や、ケーススタディを行う授業も多いことが挙げられるだろう。興味のある分野の調査でも述べたように、やはり体験学習や身近に感じられる内容を選択する傾向がある。反対に、最も少ない『住まいと社会』は「自然と共に住まう」「地域と住まい」など、キーワードからはイメージしにくかったことも理由のひとつではないだろうか。また、環境学習や地域学習などとして、総合的な学習の時間や消費生活分野で学習することも多く、家庭科の住居分野での学習と認識されていないこととも推測される。

第5章 興味・関心のある住まい学習の内容

生徒が興味・関心を持っている住まい学習の内容を把握するため、高校の家庭科で学習する住居分野の内容について「興味がある=5」「どちらかといえば興味がある=4」「どちらともいえない=3」「どちらかといえば興味がない=2」「興味がない=1」の5段階で評価してもらった。評価項目は「経験した住まい学習の内容」でも使用した5領域(『人と住まい』『住まいの空間』『住まいと環境』『住まいの維持・管理』『住まいと社会』)からなる全16項目で、対象校で使用する家庭科の教科書を参考に項目内容を作成した。

1. 平均値比較でみる傾向

5段階評価の結果を,項目ごとで平均値を出し比較を 行った(図4)。

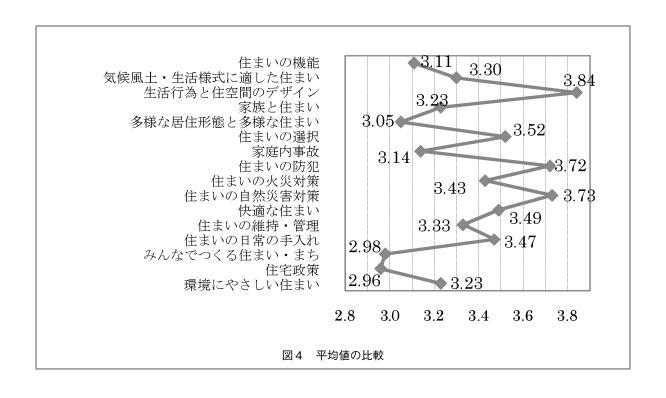
最も興味・関心を持たれている項目は「生活行為と住空間のデザイン」であり、次いで「住まいの自然災害対策」、「住まいの防犯」となっている。反対に、最も興味・関心を持たれていない項目は「住宅政策」であり、次いで「みんなでつくる住まい・まち」となっている。

「生活行為と住空間のデザイン」の興味・関心が高い理由として、自分の住まいをより住みやすくしたい、という希望が反映されているようだ。自分の部屋をもつ生徒がほとんどであり、高校生になって自分のプライベー

トな空間を作りたいという希望が表れていると思われる。次いで興味・関心の高い「住まいの自然災害対策」と「住まいの防犯」については、2011年3月11日に発生した東日本大震災の影響を強く受けていることが推測できる。毎日のようにテレビや新聞で被災地の様子を見ることで、関連する学習への興味・関心が高まったのだろう。

「住宅政策」の興味・関心が低い理由としては「建築基準法」や「都市計画法」など、普段聞きなれない内容が多く、身近に感じられなかったことが理由であろう。やはり「住まいの自然災害対策」の興味・関心が高かったように、自分の生活にどのように関わっているかが分かりやすい内容の方が興味・関心を持たれやすいのだろう。「みんなでつくるまち・住まい」については、地域行事に参加する生徒が約4割存在した割には、興味・関心が低いことはやや意外であった。必ずしも「地域行事への参加=まちづくり」には繋がっていないようだ。

また、興味・関心の低い項目が家の外側、地域の問題であるのに対し、興味・関心の高い項目は家の内側、内部の問題である。このことから、高校生の住まい学習の興味・関心の範囲は、自分の住まいの範囲を越えにくいということがいえる。



2. 生活習慣指数でみる傾向

第3章2における「生活習慣指数」と、住まい学習への興味・関心との関係を考察するため、生活習慣指数における3つのグループと、住まい学習への興味・関心とのクロス集計を行った。以下はその学習項目ごとの結果である。

(1) 住まいの機能

生活習慣指数が高くなるにつれて、興味・関心も大凡 高くなる。「興味がある」生徒の割合は3グループとも 大きな相違はないが、「どちらかと言えば興味がある」 と表明する割合は得点が高いほど顕著になる。この結果 から、生活習慣指数が住まい学習への興味・関心に影響 を与えていることが分かる(図5)。

(2) 気候風土・生活様式に適した住まい

「気候風土・生活様式に適した住まい」は「住まいの機能」と比し、生活習慣指数が高くなるにつれて、さらに興味・関心も高くなる。「興味がある」「どちらかといえばある」生徒は低得点Gだと37%、中得点Gでは48%、高得点Gでは63%と差が大きい。勿論興味がない生徒は低得点Gに多い(図6)。

(3) 生活行為と住空間のデザイン

平均値比較で最も興味・関心が高い項目であったことから、「興味がある」「どちらかといえば興味がある」という生徒の割合は3グループとも高く、高得点Gでは7割を超える。一方、「興味がない」「どちらかというと興味がない」とする生徒の割合は、やはり低得点Gの方が高く36%にも上る(図7)。

(4) 家族と住まい

「興味がある」「どちらかといえば興味がある」と回答した割合は、低得点Gで30%、中得点Gで46%に対し、高得点Gでは54%と半数を超える。一方、「興味がない」「どちらかといえば興味がない」と回答した割合は、低得点Gで31%、対して高得点Gは19%とその差は大きく、対比が目立つ(図8)。

(5) 多様な居住形態と多様な住まい

「興味がある」「どちらかといえば興味がある」とする生徒は低得点Gで31%,中得点Gで30%で少なく,高得点Gでも半数を超えない。また「どちらともいえない」とする生徒の割合が全体で40%と高い比率を示すのも特徴的である。家族の有り様や、関連する住まいの「かたち」を考えることは高校生にとっては今日的にも重要なものであり、より有効な学習方法が求められる(図9)。

(6) 住まいの選択

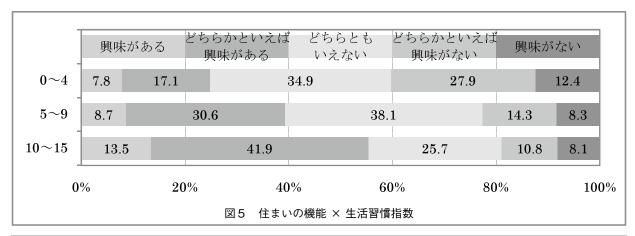
「興味がある」「どちらかといえば興味がある」と回答した生徒の割合はどのグループにおいても多く、いずれも半数を超え、高得点Gでは6割弱となる。「興味がない」「どちらかといえば興味がない」と回答した生徒は低得点Gが最も多いが、「興味がない」のみに注目すると高得点Gの割合がやや多い(図10)。

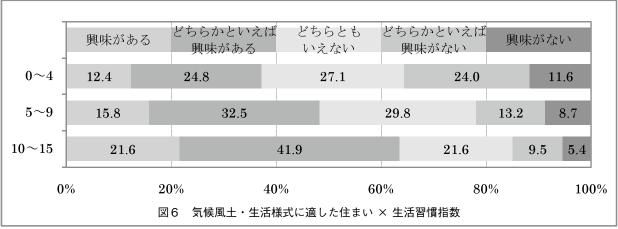
(7) 家庭内事故

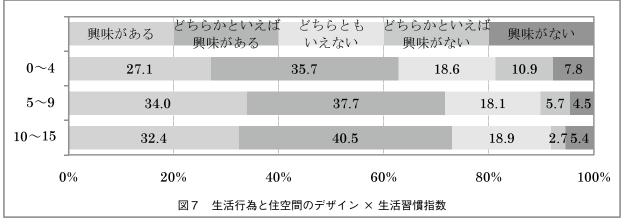
住まい学習の中では、各課程で良く取り上げられる学習内容だが、必ずしも興味・関心は高くはない。「興味がある」「どちらかといえば興味がある」とする生徒は3グループとも3割から4割程度に止まり、比率が低い。低得点Gで興味がない生徒の比率が30%を超えており、その比率の高さが目立ち、「家庭内事故」への興味・関心の低さが分かる(図11)。

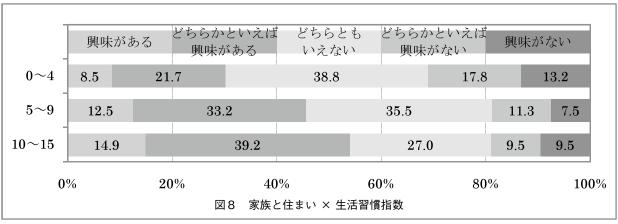
(8) 住まいの防犯

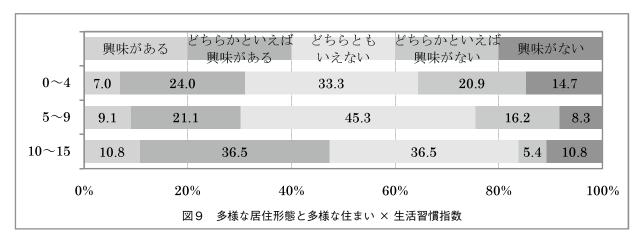
「興味がある」「どちらかといえば興味がある」と回答した割合はどのグループにおいても高く、「住まいの防犯」が報道でも話題を呼び、生徒の関心は高い。一方、低得点Gの「興味がない」「どちらかといえば興味がない」とする生徒の割合は、高得点Gのそれと比較すると、約2倍であり、その差が大きい(図12)。

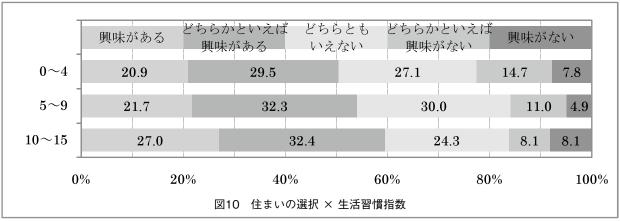


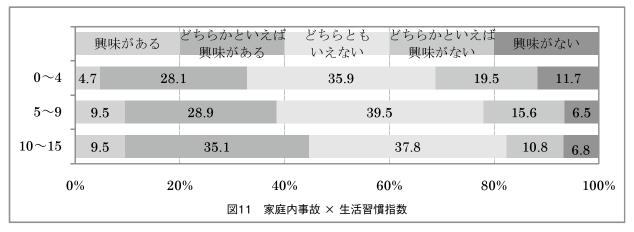


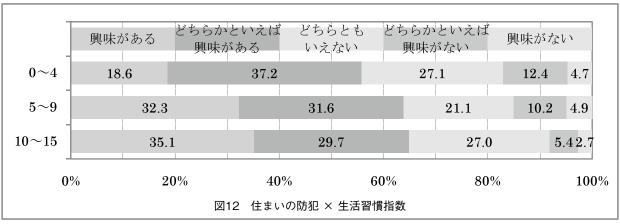












(9) 住まいの火災対策

「興味がある」「どちらかといえば興味がある」生徒は、低得点Gで4割に届かないものの、中得点G、高得点Gでは半数を超え、指数が高いほど興味・関心が高くなる。だが「興味がない」「どちらかといえば興味がない」の割合は低得点Gが最も高いが、高得点Gでも結構高い(図13)。

(10) 住まいの自然災害対策

どのグループにおいても「興味がある」「どちらかといえば興味がある」の割合が高く、高得点Gでは7割弱の高率になる。平均値比較と同様に、おそらくは東日本大震災の影響が大きいと推測される(図14)。

(11) 快適な住まい

生活習慣指数が高くなるにつれ、興味・関心も高くなるという結果になったが、他の項目と比較するとグループによる割合の差が少ない。「興味がある」と回答した割合は、低得点Gと高得点Gを比較しても5ポイント程の差であり「生活習慣指数」による影響がやや少ない項目だということが分かる(図15)。

(12) 住まいの維持・管理

「住まいの維持・管理」については高得点Gの「興味がある」「どちらかといえば興味がある」と回答した割合が他のグループよりかなり高いこと,反対に低得点Gでは「興味がない」「どちらかといえば興味がない」と回答した割合が他のグループに比べ高いことが特徴的である。「住まいの維持・管理」は日常生活を反映した生活習慣指数の高い生徒が当然ながら興味・関心を持っている項目だということが分かる(図16)。

(13) 住まいの日常の手入れ

これまでの項目とは異なり、「興味がある」「どちらかといえば興味がある」と回答した割合は、中得点Gが最も高いという変則的な結果になった。生活習慣指数において、「掃除の手伝い」が多いことも推測され、関連して「日常の手入れ」を比較的理解していることの表れであろう(図17)。

(14) みんなでつくる住まい・まち

どのグループでも「興味がある」「どちらかといえば 興味がある」とする比率は低く、高得点Gでも4割に過 ぎない。高校生にはイメージしにくく学習機会も乏しい と思われる。従って「どちらともいえない」とする比率 が41.5%と16項目中で最も高い(図18)。

(15) 住宅政策

「興味がない」「どちらかといえば興味がない」と回答した割合は、これまでと同様に低得点Gの割合が高いものの、「興味がある」と回答した割合は低得点Gが最も高く11.6%に上る。「住宅政策」は全体的に興味・関心の低い項目であるが、低得点Gにおいては、他とグループに比しやや興味・関心が高いという結果となっている(図19)。

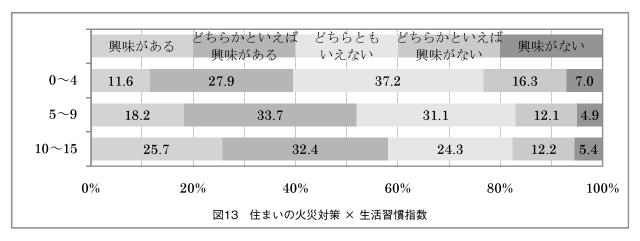
(16) 環境にやさしい住まい

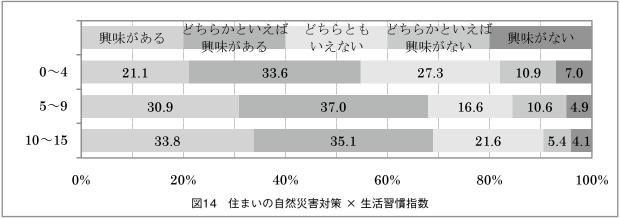
「環境にやさしい住まい」について「興味がある」「どちらかといえば興味がある」生徒の比率は、高得点Gでも半数に届かず、低得点Gでは37%に止まる。「みんなでつくる住まい・まち」と同様、高得点Gにおいても「興味がない」「どちらかといえば興味がない」の割合が高く、「まちづくり」や「環境」等に関する学習については、上記同様、学習機会が乏しいことと相まって生徒の興味・関心は低い(図20)。

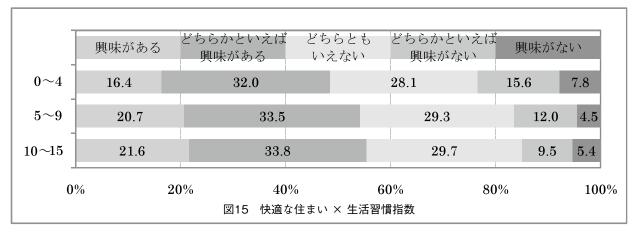
(17) 生活習慣指数でみる傾向のまとめ

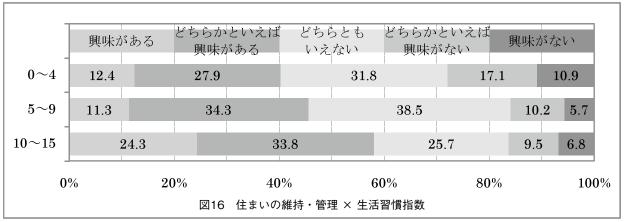
以上の結果から、生活習慣指数と住まい学習への興味・ 関心には強い関係があることが分かった。生活習慣指数 が高くなるにつれて住まい学習への興味・関心は高くな り、反対に生活習慣指数が低くなると興味・関心も低く なっている。

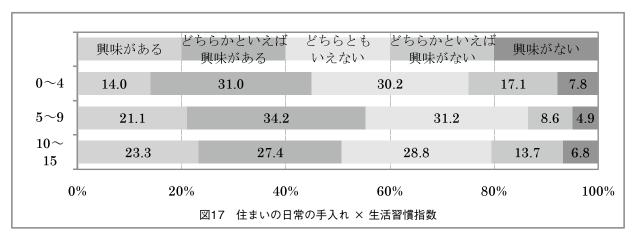
この傾向は、特に「住まいの維持・管理」においてよく表れていた。ここでは高得点Gは他のグループより興味・関心が非常に高く、低得点Gは他のグループより興味・関心が非常に低かった。つまり、掃除や洗濯、食事作りなど、生徒の家庭における家事・地域行事参加が住まいの問題に気付くきっかけとなり、「住まいの維持・管理」という、自分たちの住まいをどのように管理すべきか、という問題に対する興味・関心へと繋がっている

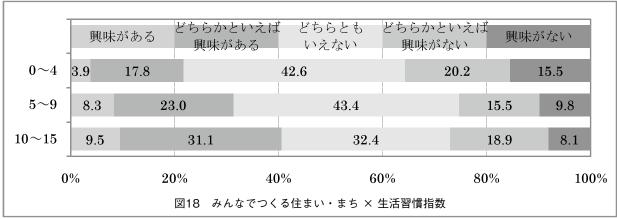


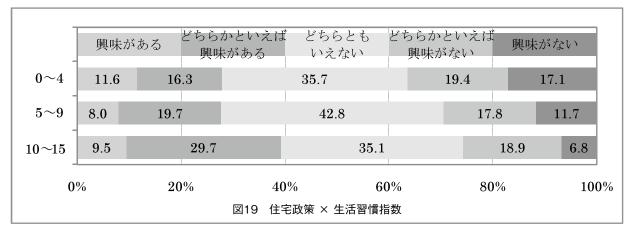


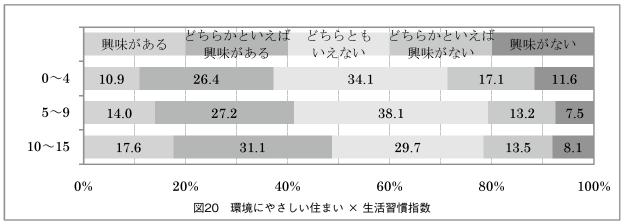












ことが推測できる。

また、「住宅政策」においては、低得点Gの特徴的な傾向がみられた。「興味がある」「どちらかといえば興味がある」と回答した割合が、中得点G、高得点Gに少しだけ近かった。もちろん「興味がない」という回答の割合も多かったが、「住宅政策」に関わる学習は、必ずしも生徒にとって興味・関心の低いものとは言えないようである。

生活習慣指数と住まい学習への興味・関心には強い関係があり、それは当然の結果でもあるが、高校生が日常的に出来る範囲であっても、家庭での家事参加が、広く家庭科の学習への興味・関心のきっかけになっているのは既往の調査等からも明らかであり、また今回の住まい学習への興味・関心についても一定の傾向が見られた。住まい学習においても、例えば、住まいの維持・管理(含む住まいの日常の手入れ)を家庭における家事参加や、広く住まいの安全安心に関する改善などと関連付けながら、学習していくことが、生徒の理解につながるとものと考える。

第6章 おわりに

今回の高校生の住まい学習に関する意識調査から、大きく2つのことが指摘できる。まずひとつは、第5章で述べたように、住まい学習の領域によって興味・関心に差があることだ。『住まいの空間』を除いた4つの領域で、興味・関心を数値化した平均値に一定の傾向がある。さらに、詳しく領域内の項目の平均値をみると、例えば『住まいの維持・管理』領域では「快適な住まい」と「住まいの日常の手入れ」の興味・関心が高く、「住まいの維持・管理」はやや低い。このような平均値の差を勘案すると、「①快適な住まい」のために必要なこと→「②住まいの日常の手入れ」の大切さ、→「③住まいの維持・管理」の体系化、という学習の順序を考えることができる。生徒の興味・関心に沿った順序での学習を行うことができれば、より効果的な学習に繋がるのではないだろうか。

ふたつに、生活習慣指数によって、住まい学習への興味・関心に差が出るということだ。第3章で設定した生活習慣指数を3つのグループ(低得点G、中得点G、高得点G)に分けて住まい学習への興味・関心との関係をみると、生活習慣指数の高いグループは興味・関心が高

く、生活習慣指数の低いグループは興味・関心も低いという結果になった。つまり、生徒の家庭での家事・地域行事参加と住まい学習への興味・関心には強い関係がある。当然の結果かもしれないが、家庭での家事・地域行事参加が家庭科の学習意欲へも繋がっているといえるだろう。今後、家族の多様化、住まいや住まい方の多様化に伴って、個々人の生活観の形成と具体化を図れるよう、支援していくことが学校現場でも求められる。その支援のあり方については、学校、家庭、さらには地域(広く社会)が、協働して進めていかなければならない課題である。

最後に、調査にご協力頂いた高等学校の生徒の皆さん、 並びに家庭科担当の先生方に深く感謝申し上げます。

一注一

- 1) 断日本住宅総合センター住生活月間実行委員会作成 学校で住教育に取り組んでみませんか? 一住まいと 暮らしの視点から教科等を横断して取り組むことがで きる『住教育』の授業づくりガイド 2008年5月
- 2) 大和ハウス工業株式会社 家づくり・街づくりを考える 住環境教育DVD学習教材/指導書 2012年1月. などがある。
- 3) 住環境教育研究会編 「住教育-未来へのかけ橋」 ドメス出版 1982年11月